

# 堀口九萬一

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』



この記事には**複数の問題があります**。改善 (<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%A0%80%E5%8F%A3%E4%B9%9D%E8%90%AC%E4%B8%80&action=edit>)やノートページでの議論にご協力ください。

- 出典**がまったく示されていないか不十分です。内容に関する文献や情報源が必要です。(2015年5月)
- 独自研究**が含まれているおそれがあります。(2015年5月)

**堀口 九萬一**（ほりぐち くまいち、1865年2月23日（元治2年1月28日） - 1945年（昭和20年）10月30日）は日本の外交官、漢詩人、随筆家。号は長城。詩人堀口大學の父として知られる。

## 来歴・人物

越後長岡藩の足軽の子として生まれる。彼が3歳の時、戊辰戦争で父は戦死。長岡藩が賊軍の汚名を着せられる中、母子家庭で苦学して育つ。

秀才として知られ、18歳のとき地元長岡の学校で校長となる。上京後、東京帝国大学法学部に最優秀の成績で入学。大学在学中、1892年に息子が誕生。後の詩人堀口大學である。

1894年、日本初の外交官及領事官試験に合格。外務省領事官補として朝鮮の仁川に赴任中、1895年、閔妃暗殺に際して、朝鮮の大院君に日本側から決起を促した廉で停職処分を受ける。1年後、1896年に復職するも、外交官としては陽の当たらない道を進むことを余儀なくされた。

臨時代理公使としてメキシコに赴任中、1913年、メキシコで軍事クーデターに遭遇。フランシスコ・マデロ大統領が殺害された際には、身を挺して未亡人と子供たちを保護。さらに日本の武士道を説いて、大統領妻子に危害を加えぬことを革命軍に保証させ、サムライ外交官と謳われた。

他にオランダ、ベルギー、スウェーデン、スペイン、ブラジル、ルーマニアに赴任。最初の夫人と死別（1895年）した後、ベルギーで白人女性と再婚した。次男はスウェーデン在勤中に生まれたので、地名にちなみ「瑞典」と名づけられた。堀口瑞典は同盟通信社記者として、大戦中はチューリッヒ特派員であった。戦後は産経新聞に在職した。

当初は長男大學も官界に進ませるつもりだったが、病弱な大學が文学に志を持っていることを知ると、彼を自分の任地に呼び寄せ、息子が30歳になる頃まで養って文学修業を助けた。

1925年、ルーマニアを最後に依願免官、以後、講演、随筆などで活動する。1927年、オランダの作家エレン・フォレスト（Ellen Forest）の、日本を舞台とした小説『雪さん』を『女性』に翻訳連載。随筆集は、親しかった長谷川巳之助が興した第一書房から刊行された。

太平洋戦争（大東亜戦争）中には「アングロサクソンの残忍性」「今度は米国は負ける」など戦意高揚の文章を書いている。敗戦直後の1945年10月に死去。

## 著作

- 游心録、第一書房、1930
- 南米及び西班牙 平凡社、1933
- 外交と文藝 第一書房、1934
- 世界と外交 第一書房、1936
- 世界と世界人 第一書房、1936
- 世界の思ひ出 第一書房、1942
- 長城詩抄 堀口大學訳 大門出版、1975

## 参考文献



出典は列挙するだけでなく、脚注などを用いてどの記述の情報源であることを明示してく



堀口九萬一



ださい。記事の信頼性向上にご協力をお願いいたします。(2015年5月)

- 工藤美代子 『黄昏の詩人 堀口大學とその父のこと』（マガジンハウス、2001年）
- 柏倉康夫 『敗れし国の秋のはて 評伝堀口九萬一』（左右社、2008年）

「<http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=堀口九萬一&oldid=55414286>」から取得

カテゴリ: 戦前日本の外交官 | 日本の随筆家 | 東京大学出身の人物 | 新潟県出身の人物 | 1865年生 | 1945年没

- 最終更新 2015年5月2日 (土) 23:52 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。